

アトモスフィア

不明を恥じる

花岡文雄*

あの日から二年半近くが過ぎようとしている。しかし自分の中で時計は止まったままのようだ。というか、同じことを考えては後悔し、を繰り返すだけで一歩も先に進まない。

2011年3月11日の午後2時46分、あれは急に襲ってきた。午後3時からの学内での内部進学生への説明会に向かうため、教授室でネクタイを締めていたちょうどそのとき、何の前触れもなく、未だかつて経験のない不気味な、そして大きな揺れが襲ってきた。築1年、地上9階地下1階の耐震構造建物の最上階にある私の部屋は、ほぼ10分ほど揺れていただろうか。書棚の本やら書棚の上の論文別刷の入ったカートンボックスが容赦なく落ちて来て、小さなディスクッションテーブルの下に身を隠していなければ、私は間違いなく大怪我をしていたであろう。小学生のときに「地震が起きたら机の下に頭を隠すように」と担任の先生から厳しく教えられたことが、60年も経って役に立った。

同じ階にあるわれわれの研究室では、固定していなかった機器が倒れたり、机の上からずれ落ちたりして、大きな被害が出た。避難が早かったせいか、研究室の誰一人怪我もしなかったのが、何よりであった。その夜帰宅してテレビを観ると、東北地方は津波で大惨事になっており、さらに東京電力福島第一原子力発電所の電源喪失による冷却機能の停止で、使用済み燃料プールの冷却が不能に陥るなど、東日本が奈落の底に転落したような状態になったのはご存知のとおりである。その後の福島を中心とした放射能汚染や電力不足による計画停電などを経て、一時、原発の安全性が問われてわが国のほとんどの原発がいったん停止状態になり、脱原発のエネルギー戦略などが盛んに議論された。しかし最近では、日本のかかりの人々の心から災害が忘れ去られ、アベノミクスなどと表面的な景気を持ち直し、そして原発の再稼働、さらには開発途上国への原発の輸出までが行われようとしている。

原発事故の直後、それまで私の脳裏から消えていた約50年前の記憶が突如よみがえった。それは駒場の大教室で受けた玉野井芳郎先生の「経済学概論」の講義である。そのとき、先生は原発のことを「ブレーキのない自動車」にたとえられた。すなわち原発に使用されたウラン燃料の最終処理が理論的に不可能であることを喝破されて、「原子力の平和利用」などと世間で喧伝されている原子力発電のことを厳しく批判された。そのとき、私は「なるほど、そういう考え方も出来るか」と思ったものの、それ以上深く考えもせず、そのことは次第に記憶のかたに消えてしまっていた。恥を承知で白状すれば、今回の事故が起きるまで、日本に50基もの原発が存在することすら知らなかった。この日本列島という世界中の地震の何割もが起きている地域において、原発を建設し稼働するということが如何に危険であるかは、玉野井先生の教えを受けた者として、当然予測していなければならなかったのである。

もう一つ後悔することは、自分が身を置いたことのある放射線生物学研究室という理化学研究所の一部門の名前を変更し、細胞生理学研究室としてしまったことである。後者も私が主任研究員を退いてから消滅したので、前者は当然消え行く運命にあったとは思ふ。しかしそれにしても放射線生物学研究室という名称を、現代的でないから、そして生化学・分子生物学を目指す若い研究者が集まりにくかったから、という理由で安易に変えてしまったことは、今回の福島原発事故における「放射線生物学」という学問の重要性を考えると、大いに反省すべき点である。研究室の名前は必ずしも研究内容を反映しているとは限らず、実際に花岡細胞生理学研究室は「遺伝子損傷の修復メカニズムの解明」を一つの大きな研究テーマとしていた。そうは言っても、たかが名称、されど名称であり、これも私の不明の致すところである。

以上、二つの点において、玉野井先生の講義を受けた一科学者として、また放射線生物学という学問分野の一端を担っている研究者として、自らの無知、無関心および考えの至らなさを痛感させられた今回の大災害・事故ではあった、と過去形で書いてはいけないのである。今もなお、津波で家族や家を失った方々、福島でやはり原発事故に起因する事象で家族を失い、高い放射能汚染によって住む家や土地から遠ざけられている方々が多数おられる。国が最大限の手だてで災害前の状態に復帰させることを強く希望し、またわれわれ研究者は様々な手段でそれをサポートしなければならないと思う。

*学習院大学理学部生命科学科教授